

米原歴史文化街道

米原市の歴史・文化財を歩く ⑨7

松尾寺の丁石

— 新指定文化財② —

参詣者の利便を図る丁石

霊仙山の信仰にかかわる山寺・松尾寺（上丹生）は、寺伝によると、天武天皇九年（六八〇）に役行者が雲に乗って飛来した聖観音像と十一面観音像を洞窟内に安置したことに始まります。かつて山頂に霊山寺があり、養老元年（七二七）、白山を開いた泰澄が本尊を安置し、神護景雲三年（七六九）に、法相宗の僧宣教が山麓に霊山寺七ヶ別院を建立しました。松尾寺はそのひとつです。

松尾寺山（五〇四m）中腹の寺院跡（県指定史跡）からは、神仏の住まう霊仙山頂を一望することができまう。かつて威容を誇った本堂は五六豪雪で倒壊しましたが、境内には文永七年（一二七〇）の年号を刻んだ石造九重塔（重要文化財）がのこされています。

松尾寺には、下丹生から登る参詣

道と西坂から登る参詣道があり、ともに麓の参詣口を起点として、あわせて三一基の丁石が建てられています。室町時代末のものが見られ、県内にのこる丁石の中でも古く、その本数も多いうえに、もともとの場所に良好にのこっていることから、昨年一〇月二四日に市の文化財に指定されました。

地域に支えられた松尾寺

丁石とは、一町（約一〇八m）ごとに建立された石造の道しるべのことで、多くには、仏・菩薩の尊像または種子（梵字）や町数・施主・建立年月日などが入っています。仏教の信仰に基づく交通文化財です。かつて、一町、二町と教えながら寺をめざした参詣者の姿が思い浮かびます。

下丹生参詣道の丁石は二・五・

六・七・八・十の計六基がのこり、いずれも石灰岩製です。頭部にはそれぞれ梵字を刻み、その下に丁数を入れた簡素なもので、銘文はわずかに八丁石にあり、「為善慶 梵字（バイ）八丁 佐和山新九郎」とあります。これらとは別に、昭和初期に建立された丁石が十三基あります。

一方、西坂参詣道の丁石は初一丁から十八丁石まで、三・八・十一・十四・十五の五基が欠けています。初一丁から十三丁石までは石灰岩製で、十六・十七・十八丁石の三基は花崗岩製です。

こちらでも下丹生側同様、上部に梵字と丁数を入れています。初一丁には「願主佐和山 梵字（キリーク）初一丁 口上宗庵公」とあります。

両参詣道ともに同じ形式で、室町時代末頃の建立と推定されます。ただし、西坂の花崗岩製の三基は石質も違い、銘文の施法などから江戸時代初期の建立と推定されます。西坂の柴田家には、参詣道や丁石を描いた絵図が伝わっています。

丁石を奉納することで参詣者の便宜を図り、功德を積みまます。室町末のものには二基に「佐和山」の銘が刻まれていることから、彦根（鳥居本）の人物の関与が考えられます。両参詣道にあることから、このころ

参詣道が整備され、一般の人の参拝が始まったようです。江戸初期のものは西坂側にあり、奉納者は近隣の樋口と番場の人です。昭和初期のものは、醒井や上下丹生の人が中心で、昭和一〇年の秘仏御開帳に合わせて整備されたと考えられ、JR醒ヶ井駅が参詣の窓口だったことがわかります。今も「松尾寺山登山道保存会」が整備をしていますが、室町時代から続いてきた歴史がわかり、寺を支えた地域社会が垣間見えます。

（歴史文化財保護課）



▲【松尾寺参詣道丁石観察会】日時:4月29日(祝) 詳細は歴史文化財保護課 (TEL 55-4552)